鹿角市歴史民俗資料館調査資料 2

鹿角の土人形

令和 2 年 3 月

鹿角市歴史民俗資料館

例　　言

1　企画展「鹿角の土人形」を令和元年 12 月 7 日～同 2 年 1 月 31 日まで本館特別展示室で行った。

2　本書は、企画展を行うために収集した資料をまとめたものである。

3　企画展の開催、本書作成にあたり下記の方々よりご協力を得た。お名前・施設名を記し、感謝申し上げます。なお、文章中に出てくる個人名については敬称を省略させていただいた。

　また、機関名についても本文中で「鹿角市教育委員会」を「鹿角市教委」のように簡略させていただいた。

個人　　豊口秀一、井上伸雄、成田昭夫、成田ミツコ、秋元明美、村木典生
三上幸子(弘前市立博物館)、高橋　正(秋田県立博物館)
丸谷仁美(秋田県立博物館)、榎本剛治(北秋田市教育委員会)
安田隼人(小坂町立総合博物館郷土館)、荒谷由季子（大館郷土博物館）
小原伸博(花巻市博物館)、梅津秀(八橋人形伝承の会)

機関　　鹿角市教育委員会、鹿角市立大湯小学校、秋田県立博物館
小坂町立総合博物館郷土館、大館郷土博物館、秋田市立赤れんが郷土館
横手市教育委員会、弘前市立博物館、花巻市博物館、遠野市立博物館
仙台市博物館
㈱吉川弘文館編集部、岩波書店編集局ライツマネジメント部

4　本書の執筆、土人形の撮影・採寸は藤井安正、文書校正・割付・製本は三村　桂、安保牧子、土舘里華が担当した。付録のぬり絵は三村桂が写真トレースをした。

5　本書を執筆するにあたり多くの文献を参照したが、土人形の名称については一般的に知られている名称を採用した。

6　本文に出てくる書籍については『・・』、論文名・固有名詞は「・・」、引用文は＜・・＞、聞き取りは≪・・≫で括った。末尾に記載した引用・参考文献については従来どおりの表記に従った。

　また、引用した文章については原文のママ載せたが、旧字体で入力できないときは当用漢字を使用した。

7　土人形等の写真掲載については収蔵者（個人・施設）から許可をいただいた。

　また、第 1 図享保の比の土雛図、第 2 図土人形の製作工程に示した図絵の使用については各出版社に問い合わせ、許可をいただいた。

8　写真図版の縮尺は任意である。また、図版・表等については引用・参考文献をもとに本館が加筆・改変したものもある。

9　文中の西暦年は、高柳光寿他編『角川日本史辞典』昭和 51 年 1 月刊を使用した。

10　本書印刷には一般的な事務用プリンターを使用したことから、本来の色彩が現れていない。協力いただいた個人と施設に対し紙面を借りてお詫び申し上げます。

11　表紙写真は鹿角市教育委員会収蔵品の土人形(芸者　三味線・太鼓)である。

目　　次

1　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2　土人形の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
3　『広益国産考』と地方への伝播・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
4　土人形の製作地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
5　東北地方の土人形・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　　1）堤人形
　　2）花巻人形
　　3）相良人形
　　4）下川原土人形
　　5）八橋土人形
　　6）中山土人形
6　瀬田石土人形とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　　1）花巻人形の特徴
　　2）小坂土人形の特徴
　　3）鹿角市教委等の土人形の特徴
　　4）瀬田石土人形とは
7　瀬田石土人形・小坂土人形の製作(創始)者について・・・・・・・・・・・12
8　廃絶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
9　土人形の流通・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
10　終わりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

図版　・　表目次

◇図版◇
第 1 図　　「享保の比の土雛図」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第 2 図　　土人形の製作工程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第 3 図　　東北地方の土人形の系統図・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第 4 図　　東北地方の土人形分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第 5 図　　花巻人形の代表的な赤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第 6 図　　花巻人形の代表的な文様・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第 7 図　　特徴的な赤・文様・目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第 8 図　　菊沢陶蔵と小坂土人形・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第 9 図 ～25 図　土人形(1)～(17)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16～32
第 26 図～29 図　小坂町立郷土館所蔵の型(1)～(4)　・・・・・・・・・・41～44
◇ 表 ◇
第 1 表　東北地方の土人形一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7～8
第 2 表　花巻人形・小坂土人形等の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第 3 表　製作者の移り変わり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第 4 表　土人形観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33～40
第 5 表　小坂町立郷土館所蔵の型の種類と法量・・・・・・・・・・・・・・45
第 6 表　全国の土人形一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46～47

付録　ぬり絵（大黒天・扇持ち貴婦人）

「鹿角市の土人形」

鹿角市歴史民俗資料館

１　はじめに

平成 23(2011)年 3 月 11 日に発生した東日本大震災によって多くの尊い命が失われた。それと供に各地に伝わる民俗芸能、有形・無形の文化財や郷土資料等も失われた。

大震災から 8 年余りが過ぎ社会資本が少しずつ整備され、地域住民の心の拠り所であった民俗芸能等もそれにあわせて復興してきたが、未だにその目処がたっていないものもある。

一方、市町村部では都市への人口流出が進み、民俗芸能等の伝承者が減少し開催が危ぶまれるものや途絶えたものもある。同じようにその地域で生れた民芸品や郷土玩具も人々の嗜好の変化と製作者の減少や死亡により途絶えたものもある。

国・都道府県・市町村では重要な民俗芸能や史跡・民俗資料等を文化財に指定し、保護と伝承を図っているが、指定されたものは伝承されている文化財のほんの一部にしか過ぎない。

鹿角市には国・県・市から指定・登録された 75 件の有形・無形の民俗文化財や史跡等があるが、本企画展で取り上げた土人形は未指定である。

この土人形は、明治初期～中期に鹿角郡瀬田石村（現鹿角市十和田毛馬内字瀬田石）で作られた瀬田石土人形、昭和初期～昭和 50 年頃まで鹿角郡小坂町荒川で作られた小坂土人形であるが、いずれも廃絶し、人々の記憶から消え去ろうとしている。

本館では、このような貴重な郷土資料を記憶に留めるために企画展を実施し、記録として残すことを目的に調査資料を刊行することにした。

２　土人形の歴史

国内で最も古い土人形は縄文時代(今から約 14000 年前～2500 年前)に作られた土偶である。最古のものは滋賀県東近江市の相谷熊原遺跡から出土した土偶で、縄文時代草創期(約 13000 年前)のものである。一般的に知られているものとして晩期(約 3000 年前)の遮光器土偶がある。

土偶の用途については、下腹部が膨れたもの(妊娠の状態を示している)は安産祈願や村の繁栄を祈るためのものとして、ほとんどが壊された状態で発見されていることから病気や怪我の回復と治癒を願って作られたのではないかと考えられている。

弥生時代(今から約 2400 年前～1700 年前)にも土偶があったが「木偶(もくぐう)」も作られた。木偶は「でく」とも読み、木偶の坊と呼ばれると良い印象を受けないが、この時代には大きな役割を持っていた。その役割は縄文時代の土偶とほぼ同じだが、農耕文化が大陸から伝播してきたことによりそれに伴う祭祀的な道具として作られ、使用されるようになった。

古墳時代(今から約 1700 年前～1300 年前)には埴輪が作られた。代表的なものとして円筒形の円筒埴輪、武官の型を表した人物埴輪がある。円筒埴輪は古墳の斜面に設置され装飾と土止め的な用途を持ち、武官は埋葬者の死後の世界を守る役割を果たしていると言われている。

奈良時代(710～794 年)に入ると大陸から伝わった儒教が発展・浸透し、その祭祀道具として「人形代(ひとかたしろ)」と呼ばれる土製・木製・紙製・ワラ製のものが作られた。立体的な人形型のものが作られるようになったのは奈良時代後半～平安時代(794～1185 年)前半と言われ、罪や穢れをこの人形に背負わせる禊の人形として使用された。

平安時代中頃、貴族の間では「ひいな人形」を用いた雛遊びが行われた。同時に穢れや悪霊を取り付かせる人形を作り、これに供物をあげ、川や海に流すという習慣が発生した。この習慣が雛祭りの起源と言われている。

雛祭りは女子の成長と幸せを願って行う行事で、江戸時代中頃から盛んとなり享保期(1716～1736 年)には豪華で華麗な衣裳人形(享保雛)が作られた。都市部で雛祭りが盛んになっていくなかで、同じ頃、地方では雛人形として郷土人形が作り始められる。

郷土人形は、土や木あるいは紙や大鋸屑（おがくず）の練り物を材料としたもので、大量生産された安価な人形で、その大半を土製の人形(土人形)が占めている。

土人形のルーツと言われているのが京都の伏見人形で、稲荷神社の総本社である伏見稲荷大社の周辺で作られていた伏見人形である。この人形は江戸時代初期(17 世紀前半）から作られており、明治時代初期には伏見街道沿いに 60 軒程の工房や商店が軒を連ねていたと言われている。

雛祭りに土人形が飾られていたことを示す資料として山東京伝の『骨董集 上編　下之巻(文化 10 年　1813 年成立)』(文献 1)がある。その「享保の比の土雛図」(第 1 図・引用 1)には男雛・女雛の図に寸法とともに＜すべて土をもて作り焼て胡粉、丹、緑青などにていろどりおのづから古色あり。およそ享保前後の物とみゆ＞さらに＜今も田舎には女子生れてはじめての三月の節句に江戸の今戸焼の土ひなをおくりて　祝うよし　とにかくに古俗は田舎にのこれり奥州の田家も土びなをもちふうなん＞という詞書が書き入れられている。

この詞書から、享保年間には京都の伏見(深草とも言う)周辺で土人形が作られていたこと、同じ頃、江戸では今土焼(今戸人形。今戸は現在の東京都台東区今戸)が作られ、奥州(東北地方)の田舎の家で飾られていたことが分かる。

土人形は江戸時代中頃以降、祝い事や信仰、玩具として発展し、久晶寺遺跡(石川県金沢市)、渋江遺跡(山形県山形市)、西板戸遺跡(秋田県大仙市)、松前藩第十三代藩主松前徳広墓所では埋葬者の生前の愛玩具として副葬品として埋納された例(文献 2)もある。

また、『図説　秋田県の歴史（1987 年、河出書房新社)』に米俵に乗った大黒天の型(製作地不明）が掲載されており、その背面には天保六(1835)年未八月吉の刻文に続けて飢饉の災難除けを願った文章が刻まれている。

鹿角地方ではいつ頃からこの土人形を飾っていたのだろうか。

時代は明治。場所は鹿角郡毛馬内町である。毛馬内町長を務めた伊藤良三(注 1)の著書『毛馬内郷土史資料(一)』(文献 3　、引用 2)に、明治時代の雛祭りの様子が＜節句のお雛様はいわゆる大きい方には立派な本式の人形があったが　一般にはくゝり人形(注 2)という簡単な人形もあった＞と書き留められているが土人形が飾られていたかどうかについては触れていない。

市内で土人形が雛祭りのときに飾られていたことを知ることができる資料が『鹿角市史民俗調査報告書第四集－十和田の民俗(下)』(文献 4)である。毛馬内に住むご婦人(ご存命であれば 100 歳を超える)から聞きとったもので＜かべ人形(注 3)を飾った。五人ばやしも

出展:『日本随筆大成第一期第 15 巻』山東京伝「骨董集」480p

吉川弘文館　平成 6 年

第 1 図　「享保の比の土雛図」

あった＞(引用 3)とあるがこれ以外に見当たらない。ご婦人の年齢から大正時代後半から昭和初期のことではないかと思われる。

平成 3 年、花輪坂ノ上の藤井昭一(昭和 3 年生まれ)から鹿角市教育委員会に寄贈された民俗資料のなかに土人形の内裏雛一対と五人ばやし(衣裳雛)が含まれている。藤井昭一は≪おそらく曾祖父か祖父が購入したのだろうが分からない。子どもの頃から家にあった。雛人形(衣裳雛)と一緒に飾っていた≫と生前に語っていた。

調査を進めていくなかで花輪通大町に古くから住む井上伸雄のお宅にも土人形が所蔵されていることを知った。また、同じ花輪通横丁、毛馬内本町通の旧家にも所蔵されているという情報を得た。このことから花輪通や毛馬内本町通に面した旧家では三月の桃の節句に衣裳雛と共に、土人形をひな壇に並べ飾っていた家庭が多かったのではないだろうか。

3 『広益国産考』と地方への伝播

『広益国産考』(文献 5)は江戸時代後期の農学者であった大蔵永常(1768～没年不明)によって天保十三(1842)年～安政六(1859)年に刊行された農業書である。江戸後期の商品経済の発展に対応する農家経営方式を述べている。大蔵永常は工芸や農作物に関心を持ち、この農業書で製糖、製蠟、繊維、油料と染料作物(紫根・藍等)や果樹の栽培と製品化に至る各分野の生産技術を図入りで紹介している。この中で土人形の地方への波及状況と土人形(雛人形)の製作工程を図入りで詳細に紹介(引用 4)している。

この『広益国産考』によると江戸後期、京都の伏見では盛んに土人形作りが行われていた。＜尾州名護屋羽州邊にて造り出す事となりたり＞と京都以外でも作り始めており、さらに＜今尾州三州遠州邊農家にては、三月節句に土人形を求めて、衣裳雛と交へ飾れり。貧家にては土人形斗りをかざれり＞と各地の雛祭りの様子を紹介している。これに続けて「附　伏見人形拵

出展：大蔵永常『広益国産考』(土屋喬雄校訂　岩波文庫 1977 年 9 月)
本図は出典をもとに本館が作成した

第 2 図　土人形の製作工程

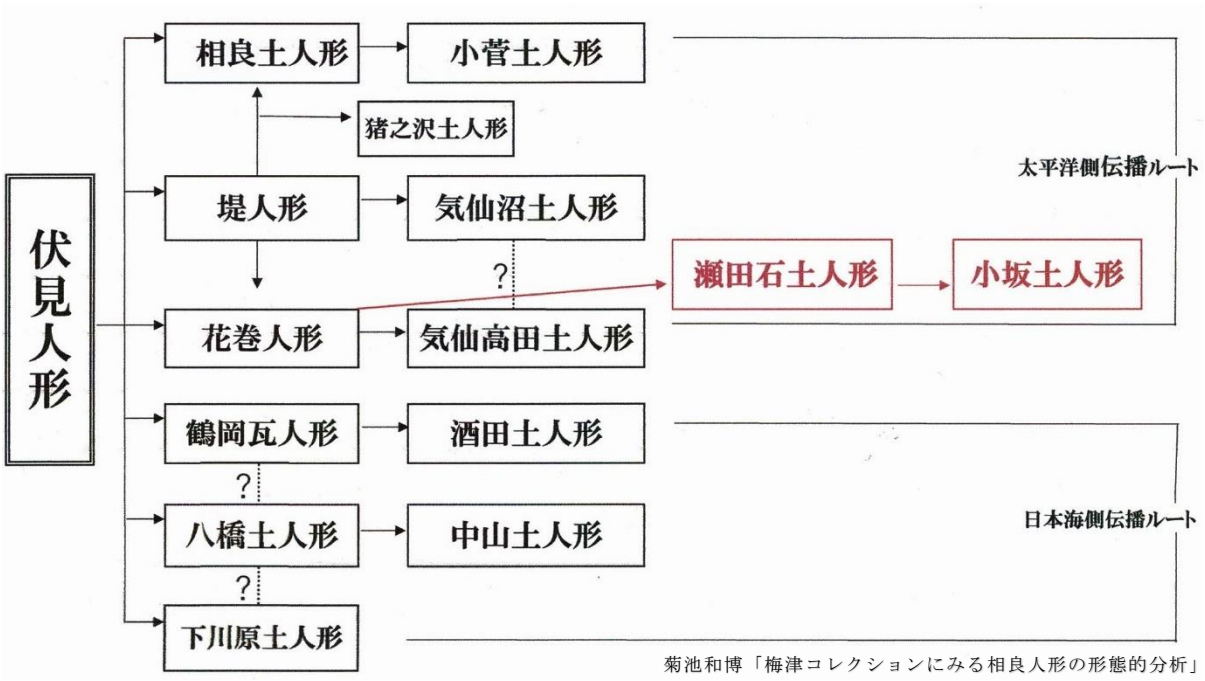
様」として土人形の製作工程の図(第2図、本館作図)をつけて詳細に記載している。
この書物が刊行された当時、すでに仙台や花巻など全国各所で土人形づくりが行われていた。明治以降、新しい土人形の窯(製作地)が全国各地で開かれていくが、その背景には『広益国産考』が大きく関わっていたと言われている。

4　土人形の製作地

全国各地で作られている土人形のルーツは伏見人形である。江戸時代の波及には街道(東海道等の五街道とこれを結ぶ脇街道)や海道(北前船や菱垣船)が、明治以降は鉄道網の整備が大きな役割を担っていたものと考えられる。
現在、継続している製作地、廃絶した製作地を拾い上げると北海道・東北地方30ヶ所(北海道なし)、関東地方3ヶ所、北陸地方11ヶ所、中部地方16ヶ所、近畿地方7ヶ所、中国地方16ヶ所、四国地方2ヶ所、沖縄・九州地方25ヶ所(沖縄なし)の計110ヶ所(第6表)である。

5　東北地方の土人形

京都の伏見人形は街道や海道を使い全国各地に伝えられ、江戸後期には下級武士の副業として、明治初期に『広益国産考』が全国に広がるとその土地の特産品として、農家の収益を上げるため土人形作りが奨励された。
東北地方の代表的な土人形として宮城県仙台市の堤人形、岩手県花巻市の花巻人形、山形県米沢市の相良人形、青森県弘前市の下川原土人形があり、秋田県秋田市では八橋土人形や横手市では中山土人形が作られた。
菊地和博は「梅津コレクションにみる相良人形の形態的分析」(文献6)で「図3　土人形系統図」(引用 5)として東北への伝播を整理している。その経路について太平洋側と日本海側の二つのルートを示し、東北の土人形のルーツを伏見人形としている。この中で瀬田石土人形や小坂土人形の伝播経路には触れていないが、瀬田石・小坂土人形も花巻人形の流れをくむものであることから、菊池和博の系統図に加筆して第3図として示した。



第3図　東北地方の土人形の系統図

東北地方の代表的な土人形の概要を下記に、東北各地に伝わる土人形の分布(製作地)とその概要を第4図、第1表として載せた。

1）堤人形(宮城県仙台市)

仙台藩主伊達綱村が江戸の陶工・上村万右衛門を招き陶器を焼かせた。その時に人形も作ったのが最初と言われ、足軽らが副業として作るようになった。

最盛期は文化・文政期(1804～1830年)で13軒の人形屋があったと言われている。浮世絵や歌舞伎を題材にした女ものは手振り、腰のひねりなど均整のとれた優雅な姿で、目や髪の描写も細やかで彩色も落ち着いている。原則として底面を作らず、下部の内側まで胡粉を塗布するが底面を作るものや紙を貼るものもある。背面は雛人形を除き、彩色されないものが多い。

東北地方の土人形の原型であり、花巻人形や相良人形に大きな影響を与えた。

2）花巻人形(岩手県花巻市)

京都の伏見人形、仙台の堤人形の影響を受けながら独自に発展した土人形で、東北北部の土人形に大きな影響を与えた。天明二(1782)年二月二日のヘラ書きがある女雛の型、製品では天保14(1843)年のものが残されている。人形の種類は1000種類以上といわれ、稼業当初から現在まで継続して作られているものもある。

彩色は赤・青(紺)・緑色が主体である。初期の花巻人形の赤はオレンジ色がかっており、深みが有る。顔料(注4)として蘇芳(すおう)が使われており、東北の他の郷土人形にも多く使用されている。文様はその上に梅・桜・牡丹等が丁寧に描かれている。明治後半以降はヨーロッパから輸入された絵の具が使用され、鮮やかに発色する顔料が使われている。

3）相良人形(山形県米沢市)

米沢藩主上杉鷹山が殖産振興のため藩士・相良厚忠(1760～1835年)に製陶所を設けて作らせたのが始まりと言われている。相良厚忠は相馬焼の技法を習得し、成島焼を完成させて日用品を焼いていた。相良厚忠は伏見人形に感動し、その製作技術を取り入れるとともに堤人形の技法を取り入れながら土人形を作り始めた。

全体的に小型で、子供を題材にしたものが多く、三角眼の描き方は江戸期の相良人形の特徴となっている。底面は粘土で作りこむものが多いが底面を作らないものもある。背面は雛人形を除けば、胡粉塗りだけで彩色されないものがみられる。

4）下川原土人形(青森県弘前市)

津軽藩士高谷金蔵が江戸後期(文化3～4年頃。1806～1807年)に九州筑前の伊万里焼の技法を学び、石川村大沢(現在の弘前市大字大沢)に窯を築き大沢窯を開いた。冬の暇な時期を利用して副業として作ったのが下川原土人形である。文化7(1810)年に下川原に移り住み、9代弘前藩主津軽寧親の産業開発の奨励を受けて本格的に製作を始めた。小型で底面を塞いだものが多く作られている。

5）八橋土人形(秋田県秋田市)

京都伏見の人形師久保田何某が移住して天明元(1781)年に製作したのが始まりとされている。天神祭に天神人形(注5)を買う風習ができたため、人形づくりが盛んになった。色々な天神人形がつくられ、形、色とも重厚さを感じるものが多い。一時廃絶したが文政期に再興された。

勝平得之の『秋田風俗十態』の中に、秋田市八橋本町・菅原神社の天神祭(4月24日・25日)でひな壇に天神人形を飾り、販売している様子を彫った版画が含まれている。

2014年に製作者道川トモの死後は八橋人形伝承の会が引き継ぎ製作している。

6）中山土人形(秋田県横手市)

九州鍋島藩の陶工・野田宇吉は盛岡藩営の窯で山蔭焼を焼いていたが、天保の大飢饉(1833～1836年)の時に廃窯となり、宇吉ら陶工は東北一円の窯を渡り歩くことになった。各地を渡り歩き平鹿町中山に良質の土があることを知り、焼いたのが始まりとされている。

宇吉死後、明治初めに長男の妻が義父の作ったものを参考に、堤・花巻・八橋人形の作風を取り入れて現在の基礎を創った。

〈青森県〉

青森市：青森手捻り人形(廃絶)
弘前市：下川原土人形

〈岩手県〉

花巻市：花巻人形
遠野市：附馬牛人形
陸前高田市:気仙高田土人形(廃絶)

〈宮城県〉

気仙沼市：気仙沼土人形(廃絶)
仙台市：堤人形

〈福島県〉

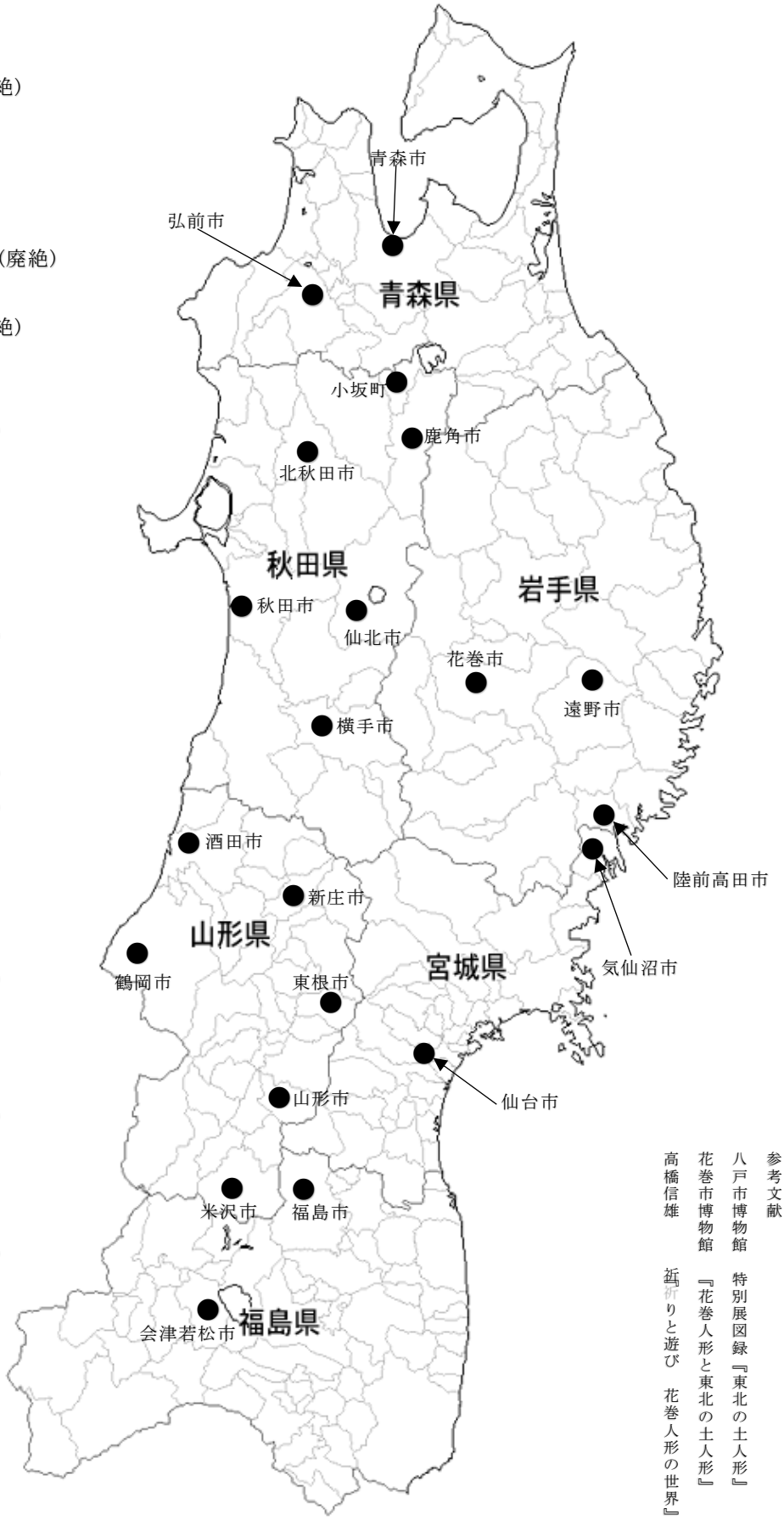
福島市：根子町土人形(廃絶)
会津若松市：中湯川土人形

〈山形県〉

酒田市：鵜渡川原土人形
　　酒田土人形
米沢市：相良人形
　　下小菅土人形(廃絶)
　　成島土人形(廃絶)
　　寺沢土人形(廃絶)
鶴岡市：鶴岡瓦人形
　　大宝寺土人形(廃絶)
山形市：平清水土人形(廃絶)
　　与六土人形(廃絶)
　　渋江土人形(廃絶)
新庄市：横前瓦人形(廃絶)
東根市：花山土人形(廃絶)
　　猪之沢土人形(廃絶)
　　狐石土人形(廃絶)

〈秋田県〉

小坂町：小坂土人形(廃絶)
鹿角市：瀬田石土人形(廃絶)
秋田市：八橋土人形
横手市：中山土人形
仙北市：白岩土人形(廃絶)
北秋田市：浦田土人形(廃絶)



第４図　東北地方の土人形分布

参考文献
八戸市博物館　特別展図録『東北の土人形』
花巻市博物館　『花巻人形と東北の土人形』
高橋信雄　『祈りと遊び　花巻人形の世界』　ほか

第１表　東北地方の土人形一覧

青森県

名　　称	所在地	製作期間(中断・廃絶)　　概要・備考
手捻り土人形	青森市	明治初年頃から製作。昭和 55 年頃廃絶。福原栄治郎(栄次郎)が始めた。
下川原土人形	弘前市	江戸後期(文政 3～4 年頃、1820 年頃)。本文 5 ページに記載。現在、高谷信夫、阿部正志が作り続けている。

岩手県

花巻人形	花巻市	享保年間(1716～1735)頃から。昭和 34 年、照井トシ死後に中断・廃絶。 本文 5 ページに記載。創始者(製作者)については花巻市博物館研究紀要第 10 号、高橋信雄「花巻人形の制作者」に詳細に記載されている。
附馬牛(つきもうし)人形	遠野市	江戸末期～明治初期に製作。昭 60(1985)年に佐々木孝和により復興。附馬牛南部家に仕えた士族・小笠原元美・宇吉父子が作ったと伝えられている。製作期間は短く、作品は少ない。 形や彩色は花巻人形の影響を強く受けているが製作方法が異なる。附馬牛人形は土に和紙を混ぜて型取りした後、焼かずに乾燥させるため、軽くて衝撃に強い特徴を持っている。人形の眼の周りを淡い赤色でぼかす手法を用いている。底面に和紙を貼り、内部に黒豆を入れる(砂を入れることもある)。背面は彩色されない。
高田土人形 (気仙高田土人形)	陸前 高田市	大正時代～昭和 30 年頃に製作。戦後、熊谷卯八郎によって復興したが廃絶した。大正時代に菊地卯吉が東京方面で製作技法を習い製作したといわれている。昭和 30 年代頃まで市内の左官や農家の副業として作られた。

宮城県

気仙沼土人形	気仙沼市	昭和 40 年ごろに廃絶。
堤人形	仙台市	元禄期(1688～1704 年)から製作。本文 5 ページに記載。

福島県

根子町土人形	福島市	幕末～明治初期に製作。
中湯川土人形	会津 若松市	1982 年から製作を開始。

秋田県

小坂土人形	小坂町	菊沢三蔵の息子陶造が毛馬内瀬田石から小坂町荒川に移り住み、昭和 3 年頃から製作する。昭和 47 年 11 月に交通事故に遭い、製作活動を断念する。
瀬田石土人形	鹿角市	本文 12 ページに記載。明治初期に菊沢(旧姓　工藤)三蔵が瀬田石に移り住み製作したことから始まる。菊沢三蔵死後(明治 26 年)に廃絶。
八橋土人形	秋田市	天明元年(1781)頃から製作。文政年間(1818～29 年)に復興。 本文 5 ページに記載

中山土人形	横手市	江戸末期頃から製作。本文 5 ページに記載。五代目野田徹・野田浩三が現在、製作している。
白岩土人形	仙北市	天明の頃から明治 29 年まで作られていた。廃絶。白岩の集落に窯場があり白岩焼とも言い片手間に作られていた。花巻人形に類似し、雲厳寺に保存されているが、江戸期のものは見られないという。
浦田土人形	北秋田市	明治 34(1901)年に廃絶。「浦田焼」とも呼ばれている。元禄期(1688～1703 年)から作られていると言われるが詳細不明。九州長崎から来た佐藤久馬が白岩焼の技術を習得し、浦田に住みつき、明治 14 年に復興したと言われている。源昌寺に浦田焼の千体仏が保存されている。庄司博信『続々　北鹿地方史論考集』2017 年刊

山形県

鵜渡川原(うどかわら)土人形	酒田市	江戸末期頃から製作。大石文子(文子は助右衛門の末裔)死後、鵜渡川原人形伝承の会が発足、大石家の指導を受けて引き継ぐ。鋳物業を経営していた大石助右衛門が近所の川が氾濫して仕事ができなくなる時期を利用して製作したのが始まりといわれている。
酒田土人形	酒田市	明治末期頃から製作。
鶴岡瓦人形	鶴岡市	江戸末期頃から製作。昭和 33(1958)年に廃絶。平成中頃に復興。
大宝寺土人形	鶴岡市	江戸末期～明治中頃に製作。廃絶。
猪之沢(いのさわ)土人形	東根市	明治末期頃まで製作。廃絶。
渋江土人形	山形市	安政年間(1854～1860) 頃から製作。廃絶。
平清水土人形	山形市	大正 5 年頃から昭和の終わり頃まで製作。
与六土人形	山形市	江戸末期～明治前期に製作。廃絶。
相良(さがら)人形	米沢市	安永 7(1778)年頃に製作。太平洋戦争中に廃絶。昭和 42(1967)年に復興。 現在、相良家の末裔が継続。
下小菅土人形 成島土人形	米沢市	明治末期から大正期頃まで製作。廃絶(時期不明)。
寺沢土人形	米沢市	江戸末期～明治初頭まで製作。
横前瓦人形	新庄市	大正末期に製作。昭和 30 年頃中断。平成 6 年頃復興。
花山土人形	東根市	江戸末期。
狐石土人形	東根市	

６　瀬田石土人形とは

瀬田石土人形(注 7)は、花巻人形の流れを汲むものと言われているがどのような特徴を持った土人形なのだろうか。企画展を開催するにあたり再度 143 点の土人形を実見したが、瀬田石土人形と判断できるような確実な手がかり(銘・記号等)を見つけ出すことがなかった。

瀬田石土人形は花巻人形の形態や文様等を継承し、それを小坂土人形が引き継いでいることを多くの研究者・愛好家が述べている。

実見した土人形と参考文献を頼りに花巻人形と小坂土人形の特徴を摘出して、瀬田石土人形とはどのようなものなのか考えていきたい。

１）花巻人形の特徴

高橋信雄『花巻人形の世界』(文献 7)、花巻市博物館第五回企画展『花巻人形と東北の土人形』(文献 8)等から特徴を拾い上げた。

製作工程は半割りにした型の凹みに粘土板を押し付け、型からはみ出した粘土を切り取り、少し乾燥したとところで型からはずし、接着面に水を塗り二つを貼り合わせる。これを風通しの良い屋外・室内で十分に乾燥させ、窯に入れて約 900 度前後の温度で焼成する。

焼成後、底面を塞ぐため和紙を貼り、このとき小石(砂)や小さく丸めた紙を入れて振ると音がでるようにしているものもある。和紙を貼り付けたあと、人形全体に胡粉を塗布することが特徴となっている。

第 5 図､6 図は展示品の中で花巻人形と判断したものから写し取った代表的な赤と文様である。

顔料は赤、黒、紫、青(群青)、泥金を多く使用している。赤はオレンジ色がかった赤(第 5 図左)と少し黒味を帯びた赤(第 5 図右)が特徴的である。江戸時代に作られた人形の赤は蘇芳(インド・マレー原産のマメ科植物、第 5 図右)から摘出した顔料を明治以降は海外から輸入した化学染料(第 5 図右)を使用している。

オレンジ色がかった赤

黒味を帯びた赤

第 5 図　花巻人形の代表的な赤

赤色を地塗りし梅や桜、牡丹(第 6 図)等の花びらや葉を描き、花びらの筋や葉脈まで細かに描き華やかさを演出しているが、梅等の花びらや葉を簡略化しているものも見られる。

人形の命ともいえる目、眉毛、口は輪郭までしっかりと描かれ、娘ものの目は曲線的な三日月状の目が特徴的である。

人形は全体的にツヤ(注 8)がある。膠水に顔料を混ぜることにより、乾燥後に自然な光沢を呈している。

さくら

ぼたん

第 6 図　花巻人形の代表的な文様

２）小坂土人形の特徴

小坂町立郷土館、秋田県立博物館所蔵の小坂土人形(第 20 図 94～第 23 図 121)を参考に特徴を拾い上げた。土人形作りのために使用した型(第 26 図～29 図)は菊沢陶造から小坂町立博物館に寄贈されたものである。父菊沢三蔵(瀬田石土人形の製作者)から引き継いだもので、菊沢三蔵は花巻人形の作者から譲られたと言われている。

成形までの手順は花巻人形と同じである。焼成後、ベニヤ板を貼り付け底を塞ぐ。内部に砂や丸めた紙を入れているものはない。

顔料として赤、黒、黄、群青(青に近い)、緑、泥金が使用されている。特に赤は混じり気のない鮮やかな赤が多く用いられ、全体的に華やかな(派手な)印象を受ける。

鹿角市文化財保護協会の機関誌『上津野第 42 号』(文献 10)に豊口秀一所蔵の土人形(司馬温公の甕割り)の写真が表紙を飾っている。その説明書きには顔料としてエナメルを使用していると記載されている。これを確認するため平成 31 年 4 月 30 日、八橋人形伝承の会の梅津秀に≪エナメル質の顔料を使用するかどうか≫を問合せたところ≪顔料は従来のもののほかに、屋外用絵の具を使用することもある。エナメルは使用しない≫との回答を得た。このことから混じり気の無い赤は屋外用の絵の具（化学染料）が使用されたのではないかと思われる。

器面が自然なツヤを呈するもの(第 23 図 116)と人工的・ガラス質的な光沢(注 8)を呈するもの(第 22 図 109)がある。混じり気の無い赤色顔料を塗ったものが人工的な光沢を持っている。

この人工的な光沢について福田利英(注 6)は＜特殊な仕上げをしている＞(引用 6)とだけ記載している。このことから平成 31 年 4 月 19 日、弘前市の阿保正志の工房(弘前市新里)を訪問した。偶然にも陳列ケースにガラス質の光沢を持つものがあったことから、その仕上げ方法を確認したところ≪顔料の剥離防止等のためニスを塗布している≫との回答を得た。

内裏雛や娘ものに描かれている文様で花巻人形の柄と共通するものは桜・梅である。牡丹や菊等は見当たらない。しかも花巻人形では桜や梅の花ビラの筋まで、葉は葉脈まで丁寧に描かれているが小坂土人形は極めて簡素に、粗末に描かれている。

人形の命は顔の表現と言われ、最も特徴が出るところである。小坂土人形の目の描き方は曲線(一本線、または平行する波線の間に瞳を入れる)で歪んだ線が多い。令和元年 12 月 14 日、成田ミツコ(菊沢陶造の娘)と家族が来館し≪晩年の頃、顔をうまく描けなくなった≫と陶蔵が言っていたと言う。成田ミツコとの会話から歪んだ目の原因とこの特徴を持つものが陶造晩年の作品であることが分かった。また、同席していた夫の成田昭夫は≪陶一といっしょに瀬田石の裏山に粘土を採りに行った≫と話してくれた。

また、目鼻立ちを際立たせるためなのか目や睫毛に沿って桃色の顔料を付加しており、この特徴は附馬牛人形から取り入れた可能性がある。

３）鹿角市教委等の土人形の特徴

今回、140 点余りの土人形を実見した。花巻人形、附馬牛人形、下川原土人形、小坂土人形と判断(思われる)したものを除き、それ以外の土人形に次のような特徴がみられた。

胎土は良質な粘土が使用され、砂や小礫等を含むものはみられない。瀬田石土人形に使われた粘土は、成田昭夫の証言から小坂土人形と同じ粘土と考えられる。

成形から焼成までは他の土人形と工程は同じである。焼成後、開口した底面は和紙で塞がれ、数例を除き器面全体に胡粉が塗布されている。底面に漢数字やカタカナ、記号(●●●)を墨書・朱書きするものもあるが、製作者名を入れているものは見当たらなかった。内部に小石(丸めた紙)を入れ、振ると音がでるように細工しているものもある。

絵付けには赤、群青、紫、黄、緑、泥金等の顔料が使用される。顔料は基本的には膠水に混ぜて使用することから乾燥すると自然な光沢(ツヤ)を発する。少し黒ずんだ赤(第 7 図上)が多い。群青は膠水と混ぜずに塗ることもある。小坂土人形のように人工的な光沢をもったものは見られない。

土人形に描かれる文様は梅、桜、牡丹等の花柄である。花巻人形のように丁寧に描くもの(第 9 図 7・8、第 15 図 55)もあるがそれ以外は簡略化(第 7 図上)され、筆の運びは雑な感じを受ける。また、娘ものの目は花巻人形に見られる三角目

第 7 図　特徴的な赤・文様・目

第２表　　花巻人形・小坂土人形等の特徴

	花巻人形	小坂土人形	鹿角市教委・他所蔵の土人形
胎土	・良質のものが使われる。	・成田昭夫の証言から、瀬田石の裏山から採取した粘土が使われる。	・良質ものが使われる。 ・文献 11、成田昭夫の証言から瀬田石の裏山で採取したものが使われている。
成型・成形・底面	・底面に和紙を貼り、その後全面に胡粉を塗布する。 ・内部に小石を入れるものがあり、振ると音が鳴る。	・底面をベニヤ板(化粧板もある)で塞ぐ。 ・底面に胡粉の塗布が及ぶものがある。	・底面に和紙を貼るものが多くある。 ・内部に砂や丸めた紙を入り、振ると音が出るものがある。 ・底面に和紙を貼ったあと、全体に胡粉を塗布するものと塗布しないものがある。 ・胎土が大鋸屑のものがある。 ・小型(12～13 ㎝程)で、底を塞ぐ(上底もある)ものもある。
彩色・表面	・赤、黒、紫、群青、泥金が多く使われている。 ・赤はオレンジ色がかった赤と黒ずんだ赤が使用されている。 ・膠水に顔料を混ぜて描くため、乾燥後は自然な光沢(ツヤ)がある。	・赤、黒、黄、群青、緑、泥金が多く使われている。 ・赤は黒ずんだ赤とほとんど混じり気の無い鮮やかな赤が使用されている。 ・群青は青に近い色彩を持つ。 ・彩色後に「ニス」を塗り、人工的(ガラス質)な光沢を持つ。	・赤、群青、紫、黄、緑、泥金が多く使われている。 ・赤は黒ずんだ赤が多い。 ・数点であるがオレンジ色がかった赤がある。 ・膠水に顔料を混ぜて描くため、乾燥後は自然な光沢(ツヤ)がある。人工的な光沢を持つものは見られない。
文様・柄	・桜や梅、牡丹が特徴的。花びらに筋がつき、葉は葉脈まで表現され、精緻に描かれている。その他の文様も丁寧である。 ・背面に文様が描かれるものもある。 ・華やかで、品の良さを感じる。	・桜や梅等の花柄は鹿角市教委所蔵他と比べさらに簡略化・簡素化されている。その他の文様も同様である。 ・背面を黒塗りするものが見られる。	・花巻人形と比べ花柄は簡略化されつつある。 ・№126、130、131 等のように丁寧に描かれるものもある。
顔の表現	・目、口、髪の毛の生え際まで丁寧に描かれている。 ・娘ものの目は三角に近い三日月型。	・三角目を呈したものはみられない。瞳と目の輪郭を描くものは花巻人形、鹿角市教委所蔵品等と比べ雑に描かれている。 ・下瞼と上瞼に桃色の顔料を塗り、目鼻立ちを際立たせている。	・娘ものの目は湾曲した三角目と、瞳と目の輪郭を描くものは花巻人形に近い表現がされている。
その他	・重ね塗りで生じる濃淡の範囲が狭い(少ない)。	・重ね塗りで生じる濃淡の範囲が広い(多い)。筆の運びが雑。	・重ね塗りで生じる濃淡の範囲が狭い(少ない)。
備考	・花巻市博物館第５回企画展『花巻人形と東北の土人形』等を参考に、特徴を拾い上げた。	・秋田県立博物館、小坂町立郷土館が所蔵する作品から特徴を拾い上げた。	・鹿角市教委、大湯小学校、豊口秀一、井上伸雄が所蔵している資料から特徴を拾い上げた。

(第 7 図下)、瞳が描かれるものも花巻人形に近い表現となっている。小坂土人形のように目鼻立ちを際立たせるために桃色の顔料(第 20 図 94 他)を付加するものは見られない。
第 2 表に花巻人形、小坂土人形、鹿角市教委等の土人形の特徴をまとめた。

4）瀬田石土人形とは

瀬田石土人形とはどんな特徴をもったものなのだろうか。第 6 章 3)で鹿角市教委等の土人形の特徴を述べたが、現在の時点で想定される瀬田石土人形の特徴は下記のとおりである。

①成型・成形：　人形の成型・成形工程は花巻人形と同じ。焼成後、人形内部に小石（または丸めた紙）を入れて、和紙を貼り塞ぐ。その後、全面に胡粉を塗布する（底面に胡粉を塗布しないものもある)。底面にベニヤ板を貼り付けるものはない。

②彩色・表面：　黒ずんだ赤が多用される。顔料は膠水と混ぜており、乾燥後は自然な光沢(ツヤ)を呈し、小坂土人形のように人工的な光沢を持つものは見られない。

③文様・柄　：　梅・桜・牡丹等が描かれている。花びらの筋や葉脈は表現されず、花巻人形と比べ簡素化・簡略化されている。小坂土人形はこの文様を引き継いでいるが、さらに簡素化したものとなっている。

④顔の表情　：　花巻人形に類似した湾曲した三日月の目、輪郭と瞳が描かれた目が描かれている。小坂土人形のように一本線で表した目、瞼の上下に桃色の顔料を描いたものは見受けられない。

花巻人形の流れを汲むことから花巻人形との判別が難しいが、小坂土人形とは底面のベニヤ板、人工的な光沢の有無、底面や瞼の上下に桃色の顔料によって判別することができる。
しかし、瀬田石土人形の特徴を確定するためには菊沢三蔵の名が墨書された土人形が多数発見され、それらの彩色・文様・表情等を細かに観察していかなければならない。
第 4 表には現時点で想定される製作地名を書き入れた。

7　瀬田石土人形・小坂土人形の製作(創始)者について

瀬田石土人形は花巻人形の系統を引くものと言われている。前述したとおり形態・文様・表情等の特徴から花巻人形の流れを汲んでいるのは間違いないと考えられる。
土人形の資料収集を開始、展示・執筆準備を始めたころ、瀬田石土人形の創始者を菊沢三蔵、小坂土人形の創始者を菊沢陶造と理解していた。
しかし、俵有作の『日本の土人形』(文献 44、引用 7)に

> 小坂人形・鹿角郡小坂町荒川　　平賀正之丈(初代)、三蔵(二代、後菊沢家の養子となる）菊沢陶造　　平賀正之丈が小坂鉱山で働いていた際、花巻人形の窯元苗代沢の職人と知り合い、後、縁故で花巻で人形造りを学び、苗代沢の型をゆずられ、小坂で独立、小坂人形を創始した(後略)。

という記載がある。
『小坂町史』(文献 9)には小坂土人形を伝えたのは平賀音之丞(正之丈と同一人物なのか不明)であると記載されている。このことから令和元年 12 月 7 日、花巻市博物館に≪幕末期から明治初期に鹿角から花巻の苗代澤家に修行のため行った者がいないか、土人形の型を分け与えた事例がないか≫を問い合わせた。
同博物館小原伸博から≪苗代澤家から聞き取り調査をした。型について、幕末や明治初期のころの話ではないが、昭和まで使用していた型は市内の方に譲った。また、出入りしていた職人は二人いたという記憶がある(この時期を小原伸博は明治後半と推測している)≫という回答をいただいたが、平賀正之丈(平賀音之丞)の存在を裏付ける情報は得られなかった。
質問が幕末期から明治初期のことであり、苗代澤家の記録にも残っていない可能性もある。さらに世代も変わり、記憶も薄れ、思い出せないのは当然のことである。

苗代澤家は、花巻市博物館の図録(文献 8)によると江戸時代、花巻城下の吹張小路に住んでいた花巻同心の出身である。初代儀八(1868 年没、太田家から養子入り)、荒次郎(1842～1908 年)、長五郎(1875～1922 年)、冨太(1905～1966 年)が製作し、昭和 10 年代に廃業している。

残念だが俵有作の文章には瀬田石土人形のことが一切記載されていない。瀬田石土人形の存在を知らなかったのだろうか、それとも小坂土人形と同一のものと捉えて記載しなかったのだろうか。瀬田石土人形と小坂土人形は製作者が親子であっても、同一の型を使っているにせよ製作地・製作者が違うことから、本来は区別するべきものと考えている。

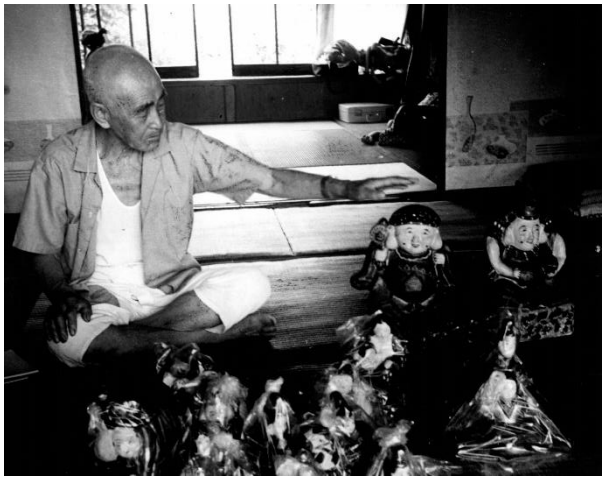
福田利英の「誇り高い郷土小坂の民芸品・小坂土人形」(文献 11) では、菊沢三蔵は現在の岩手県花巻市で生れ、明治元(1868)年頃に八戸から瓦・七輪職人として十和田銀山(注 9)に移り住んだ。同 5(1872)年に銀山が閉山したことから妻ツキ(出生地は八戸)とともに瀬田石に転居し、そこで世話になった人の苗字を貰い、工藤姓から菊沢姓に改名している。三蔵は小真木鉱山(注 10)に働きながら、瀬田石で良質の粘土を見つけたことから土人形作りをはじめ、明治 26(1893)年まで作り続けていたことになっている。

第 3 表　製作者の移り変わり

	平賀正之丈 平賀音之丞	菊沢三蔵	菊沢陶造	菊沢陶一 木村光雄
江戸時代 ～1868 年	・俵有作『日本の土人形』には菊沢三蔵の前に平賀正之丈の名がある。 ・『小坂町史』には小坂土人形の創始者として平賀音之丞の名がある。	出生地は(伝)花巻 出生年は不明		
明治時代 1868 年 ～1912 年		・明治元年頃 八戸から十和田銀山に移転。 ・明治 5(1872)年頃 銀山閉山。妻キチと瀬田石に転居。工藤姓から菊沢姓に変える。 ・明治 26(1893)年 死去。	・明治 17(1884)年 陶造誕生 ※幼少期に土人形づくりを手伝う ・明治 26(1893)年 陶造 9 歳の時父死去 同じ頃母も死去。	
大正時代 1912 年 ～1926 年				
昭和時代 1926 年 ～1989 年			・昭和 3(1928)年 陶造 44 歳。父が使用していた型をすべて持ち小坂町荒川に転居。製作開始。 ・昭和 47(1972)年 交通事故に遭い、製作活動を断念する。 ・昭和 51(1976)年 陶造死去。	・昭和 42(1967)年 陶造 83 歳の時に息子陶一、親戚の木村光雄に土人形造りを伝授するが、何らかの理由で製作していない。

菊沢三蔵が瀬田石において土人形を作るきっかけとなったのが瀬田石周辺で良質の粘土を見つけたことからとすると三蔵は瀬田石に転居する前から土人形作りの知識と技術を持っていたことになる。三蔵が花巻出身であるならば土人形に親しみ、その職人を知っていた可能性があり、教えを請い、型を譲り受けた可能性がある。その職人が平賀正之丈(音之丞)と考えられるが、資料が見当たらない。

良質の粘土について『鹿角のあゆみ』(文献 46)に毛馬内焼(注 12)の記載がある。そこには＜瀬田石にかま場があり、毛馬内の館主桜庭氏のもとに「お庭焼」の名称で日用の雑器が焼かれていたらしい。年代は天保以降と推定されるが現在のものが少ない＞(引用 9)とある。お庭焼の存在を確認しうる史料は見つけ出すことができなかったが、この記載が事実であるならば、良質の粘土が手に入り、操業可能な窯があった瀬田石に三蔵が移り住んだ理由が理解できる。



(写真:成田ミツコ提供)

第 8 図　　菊沢陶蔵と小坂土人形

創始者として平賀正之丈(音之丞)の名がある。しかし、その存在を示す史(資)料がみられないことから、瀬田石土人形の創始者を瀬田石村に移り住み、製作を始めた菊沢(工藤)三蔵と考えたほうが妥当である。

昭和 3(1928)年、菊沢三蔵の息子陶造は、父が使用したすべての土人形の型を持ち、小坂町荒川に移り住み土人形を作り始め、昭和 47(1972)年 11 月に交通事故に遭うまで製作していた。

菊沢陶造は幼い時から父の手伝いをしていたというが、陶造 9 歳の時に父は死去。同じ頃に母も死去している。土人形の製作は粘土の採取と調合・ネカセから始まる。その後型おこし、乾燥、焼成、胡粉塗布、色付けという複雑な工程が続く。幼少期にいくら父の手伝いをしていたとしても 9 歳の陶造に土人形を作れたのか。作り続けなかったのかという疑問が生じる。

花巻博物館から得た情報の中に≪明治後半に二人の職人が苗代澤家に出入りしていた≫とある。明治後半であれば陶造は二十代半ばである。この中の一人が菊沢陶造であったのではないかと思い、令和 2 年 1 月 19 日に秋元明美(陶造の孫、陶一の娘)が来館したときに確認したが、そのような話は聞いていないとのことであった。

8　廃絶

瀬田石土人形の廃絶については、高橋正(文献 15)が豊口秀一から聞き取りしている。＜三蔵の死後瀬田石人形は、この地区で製作されることはなかった＞(引用 8)とあり、このことから菊沢三蔵の死後、菊沢陶造は瀬田石では土人形を作っていないことを読み取ることができる。

さらに、幼少の菊沢陶造に土人形を作れたかという疑問から、菊沢三蔵の死後に瀬田石土人形は廃絶したと考えるのが妥当である。

菊沢三蔵が亡くなってから 35 年後、菊沢陶造が小坂町荒川に移り住み、小坂土人形を作り始めた。そして昭和 42(1967)年陶造 83 歳の時に息子菊沢陶一と瀬田石に住む親戚の木村光雄に製作技術を教えている。しかも陶一の言葉として＜現在世に出ている小坂土人形の作品の総べては今は亡き菊沢陶造の手によってなる作品ばかりである＞(引用 6)があることから、陶一と木村光雄は土人形作りを習ったが何らかの理由により製作しなかったことが分かった。これを裏付けるように秋元明美も≪そのような姿を見たことがない≫と言っていた。

明治初期に鹿角郡瀬田石村で菊沢三蔵によって作られた土人形は彼の死去によって、その土人形の流れを汲む小坂土人形も息子陶造が事故に遭い製作活動を断念した。そして後継者として技術を習得した陶一も木村光雄も製作せぬまま現在に至っている(第 3 表)。

9　土人形の流通

瀬田石土人形、小坂土人形はどのようにして市場に流通していったのだろうか。

大湯小学校所蔵品には下川原土人形や附馬牛人形、鹿角市教委や豊口秀一・井上伸雄所蔵品の中にも下川原土人形や花巻人形が含まれている。

これらはどのような経路で鹿角に運び込まれたのであろうか。

瀬田石土人形について豊口秀一は≪市日掛けして、販売していた≫と言っている。豊口家は毛馬内本町通りにある。この通りでは今でも 2 と 7 のつく日に市日が開催されており、菊沢三蔵や陶造が市日掛けしたときに豊口家の先代が買い求めたものとしても不思議ではない。

成田ミツコによると≪父も市日掛けして売っていたかも知れないが、土人形を背負い、新築の家を回り売り歩いていた。小さな大黒様や恵比寿が良く売れた。山の神は注文を受けて作っていた。鉱山や林業関係者が多かった≫という話をしてくれた。

花輪の市日は毛馬内よりも規模が大きく、明治 25(1892)年の頃は月 6 回開催(上町と下町に分かれて各 3 回。現在は 3 と 8 の付く日に開催)されていた。宮城一杉の『花輪町史(昭和 32 年刊)』(文献 48)には＜忽然として大百貨店が出現するのだ＞(引用 10)とあり、尾去沢や八幡平地区からも大勢の買い物客が訪れ賑わっていた。花輪町通りや近郊に居住する人々は、花輪の市日や訪問販売で来た時に土人形を買い求めたと思われる。

では、花巻人形や附馬牛人形、下川原土人形は「誰が・どのようにして鹿角まで運び、販売した」のだろうか。

例えば、花輪から盛岡方面に出荷された製品として鹿角鎌(注 11)がある。『鹿角市史第三巻(上)』(文献 13)や『同第四巻』(文献 14)、『花輪町史』によると鹿角鎌は、文政年間(1818 年～1830 年)には花輪の特産物として知れ渡り、明治二十年代には近隣の村々から市日の立つ日にわざわざ買い求めに来る人達がいたほか、盛岡及び三戸八戸方面、津軽にも出荷していた。

『下川原土人形』(文献 36)によると、明治から大正にかけて弘前には土人形を取り扱う店が 10 軒以上あった。その販路は松前や北秋田(鷹巣)あたりまで広がっていたようであり、下川原大館を経由して、または大柴峠(来満街道)を越えて毛馬内・花輪に入ってきてもおかしくない。

足立孔(文献 12)によると、花巻人形は盛岡あたりでも売りさばかれていたようである。

花巻人形・附馬牛人形・下川原土人形は、鹿角鎌の行商帰りの土産品として、花輪や毛馬内の市日で販売するために仕入れた品物の一つであったのではないだろうか。

10　終わりに

企画展「鹿角の土人形」の開催、本書を執筆するにあたり関係機関並びに所蔵者のご理解とご協力を得て土人形 143 点と型 29 点を実見し、展示させていただいた。

瀬田石土人形・小坂土人形が花巻人形の流れを汲んでいるという手がかりをもとに、それぞれの特徴をまとめてみた。

しかし、瀬田石土人形の特徴を不確実のまま提示することになった。これを確実なものにするためには菊沢三蔵が製作し、且つ名が書き込まれた土人形が発見されることが不可欠である。さらに数多くの土人形を実見し、比較研究することによって確実なものとなっていく。

菊沢三蔵、息子陶造の死去によって瀬田石土人形も小坂土人形も廃絶したが、二人が丹精こめて製作した土人形を鹿角市郡内の人々が買い求め、これを引き継いでいるはずである。

民俗資料、民芸品と言うと誰もが「時代遅れ」と言う。ましてや家の新築時や世代が代わると邪魔者扱いされ、終いには廃棄されてしまう。

土人形をはじめとする民俗資料、民芸品等はその土地で作られ、親しまれてきたもので故郷の歴史や風土を知ることができる貴重な資料である。

廃棄する前に保存・伝承していくための手立てを探ってほしい。

1

2

3

4

5

6

7 8

第 9 図　土人形(1)

9

10

11

12

13

14

15

16

17

第 10 図　土人形(2)

18

19

20

21

22

23

24

25

第 11 図　土人形(3)

26

27

28

29

30

31

第 12 図　土人形(4)

32

33

34

第 13 図　土人形(5)

35

36

37

38

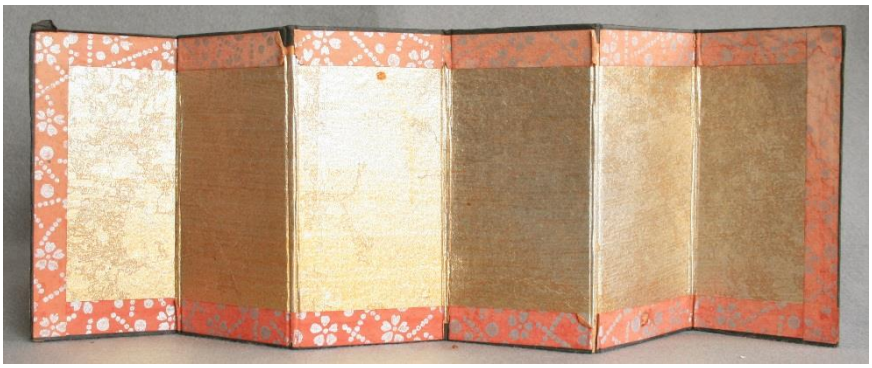
39

40

1～37
鹿角市教育委員会所蔵

第 14 図　土人形(6)

41



42

43

44

45

46

第 15 図　土人形(7)

47

48

49

50

51

38～52　大湯小学校所蔵

52

53

54

55

56

第 16 図　土人形(8)

57

58

60

59

61

62

63

64

65

第 17 図　土人形(9)

66

67

68

75

69

70

71

72

73

74

76

第 18 図　土人形(10)

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

第 19 図　土人形(11)

87

88

91 92 93

89

90

94

95

96

97

98

99

53～93　豊口秀一所蔵

第 20 図　土人形(12)

100

101

102

103

104

105

106

107

108

第 21 図　土人形(13)

94～105　秋田県立博物館所蔵

109

110

111

112

113

第 22 図　土人形(14)

114

115

116

117

118

119

120

121

106～121　小坂町立郷土館所蔵

第 23 図　　土人形(15)

122

124

125

123

128

126

129

127

第 24 図　　土人形(16)

130

131

132

133

134

135

136

137

138

122～138　井上伸雄所蔵

第 25 図　　土人形(17)

第４表　土人形観察表

※土人形観察表の用語等の説明
・「区分」は『小坂町立郷土館博物館紀要』を参考にした。
・「資料名」は一般的に使用されている名称とした。
・「製作地」と「作者」については特定(推定)できるもののみを記載したが、間違いが多々あるものと思われる。ご教示をお願いしたい。空欄は不明である。
・底面に和紙が貼っているものについて、完全に剥がれているものを「底面の和紙は剥離」とした。底面の和紙に胡粉を塗布したものについてはその旨を書き入れた。
　また、底面を粘土で塞いでいるものは「底面を塞ぐ」、「上底」と表記した。
・彩色後に「ニス」を塗布し、人工的でガラス質のような光沢を持つものについては「光沢あり」とした。
・赤色を観察すると①オレンジがかった赤、②黒味を帯びた赤、③混じり気のない赤がある。備考欄に「赤①」・「赤②」・「赤③」と明示した。
・底面の墨書で判読できなかった文字については★とした。

コレクション名　　鹿角市教育委員会所蔵(1)　　〈藤井昭一寄贈品〉

No.	区分	資　料　名	法　　量 (高さ×幅 cm)	製作地	作　者	備　　考
1	信仰	牛乗り天神	14.5×13.2			底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「★リキ」の墨書。赤②。
2	信仰	大黒天	17.6×13.5	花巻		底面に和紙を貼り、胡粉の塗布なし。「二十」の墨書。赤②。
3	信仰	恵比寿	18.3×12.5	花巻		底面に和紙を貼り、胡粉の塗布なし。「二十」の墨書。赤②。
4	行事	高砂(翁)	15.4×11.1	花巻		底面の和紙は剥離。和紙に胡粉を塗布したかは不明。赤②。
5	行事	高砂(翁)	14.7×9.3	花巻		底面の和紙が残る。和紙に胡粉を塗布。赤①。
6	行事	高砂(嫗)	15.8×6.7	花巻		底面に和紙を貼る。胡粉の塗布なし。「一」の朱書。赤②。
7	行事	男雛	21.4×20.0	花巻		底面に和紙を貼る。胡粉の塗布なし。「二十」の墨書。赤②。
8	行事	女雛	14.5×23.0	花巻		底面に和紙を貼る。胡粉の塗布なし「二十」の墨書。赤②。
9	童子	おすわり	13.5×8.9	花巻		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。振ると音が鳴る。赤①。
10	娘	買い物	14.6×6.4	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「ロ」の墨書。赤②
11	娘	舞妓	10.1×5.6	附馬牛		胎土に大鋸屑が混入する。底面に和紙の貼り付けがない。
12	娘	扇持ち貴婦人	17.8×10.0	瀬田石		底面に和紙を貼る。胡粉の塗布なし。墨書判読できず。赤②。
13	娘	芸者(三味線)	13.4×13.1	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。墨書判読できず。赤②。

14	娘	芸者(太鼓)	13.2×14.3	瀬田石		底面の和紙が残る。和紙に胡粉を塗布。赤②。
15	行事	武将	14.9×13.0	花巻		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「★★大将」の朱書。●●●の記号。赤②
16	行事	獅子舞	13.4×11.1	瀬田石		底面の和紙が残る。和紙に胡粉を塗布。赤②
17	行事	祝い酒	17.0×8.3	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。赤②。
18	童子	馬乗り童子	13.3×9.9	瀬田石		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。
19	童子	司馬温公の甕割り	15.4×19.9	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。振ると音が鳴る。赤②。
20	童子	提灯を持つ童子	13.5×10.5			底面に和紙。「十口」の墨書。赤①。
21	動物	ねずみ	6.5×5.2			古手のものか。
22	動物	犬(鞠押さえ)	13.5×8.6	下川原		底面は塞ぐ。空気孔をあける。赤②。
23	動物	にわとり	17.5×12.0	瀬田石		底面に和紙を貼る。「ツリ」の墨書。赤②。
24	動物	にわとり	10.8×14.5	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。振ると音が鳴る。赤②。
25	行事	三番叟 または獅子舞	13.4×11.1			底面の和紙は剥離。顔料の剥離が激しい。

コレクション名　　鹿角市教育委員会所蔵(2)　　〈阿部喜一寄贈品〉

№.	区分	資　料　名	法　　量 (高さ×幅 cm)	製作地	作　者	備　　考
26	信仰	大黒天 (4 点)	11.1×8.0	瀬田石		底面の和紙が残る。和紙に胡粉の塗布なし。赤②。
27	信仰	恵比寿 (3 点)	12.0×7.0	瀬田石		底面の和紙が残る。和紙に胡粉を塗布。赤②。
28	信仰	きつね	左向 12.3×7.7 右向 12.4×7.7	瀬田石		底面に和紙が残る。和紙に胡粉を塗布。墨書判読できず。赤②。
29	信仰	きつね (宝珠抱き)	14.0×8.0	瀬田石		底面に和紙が残る。和紙に胡粉を塗布。赤②。
30	信仰	重ね餅(一対)	6.0×3.9	瀬田石		底面に和紙が残る。胡粉の塗布なし。墨書判読できず。赤②。
31	行事	高砂(翁) (嫗)	12.2×8.6 12.7×5.3	瀬田石		翁の底面の和紙に「十ネ★」の墨書。和紙に胡粉の塗布なし。赤②。
32	行事	男雛	13.4×15.2	瀬田石		底面に和紙が残る。和紙に胡粉の塗布なし。赤②。
		女雛	10.1×14.9			

33	行事	男雛	13.4×15.3	瀬田石		底面に和紙が残る。和紙に胡粉の塗布なし。赤②
		女雛	10.2×15.1			
34	行事	五人囃子(地唄)	11.0×12.2	瀬田石		底面に和紙が残る。和紙に胡粉の塗布なし。墨書判読できず。赤②。
		五人囃子(笛)	11.1×10.4			
		五人囃子(鞨鼓)	12.2×11.6			
		五人囃子(太鼓)	10.5×10.4			
		五人囃子(小鼓)	10.8×11.1			
35	行事	三番叟 (8 点)	16.0×13.6 ほぼ同一	瀬田石		底面に和紙が残る。和紙に胡粉の塗布なし。赤②。
36	童子	犬押さえ (3 点)	14.6×11.8 ほぼ同一	瀬田石		底面に和紙が残る。和紙に胡粉の塗布なし。赤②。
37	娘	扇持ち貴婦人(左)	17.5×9.4	瀬田石		底面に和紙が残る。和紙に胡粉の塗布なし。赤②。
	娘	扇持ち貴婦人(右)	17.5×9.4	瀬田石		底面に和紙が残る。和紙に胡粉の塗布なし。赤②。

コレクション名　　鹿角市立大湯小学校所蔵

№.	区分	資料名	法量 (高さ×幅 cm)	製作地	作者	備考
38	信仰	天神	11.7×9.2	附馬牛		胎土に大鋸屑が混入する。底面の和紙は剥離。背面にも彩色。ツヤなし。赤②。
39	信仰	天神	11.6×9.2	附馬牛		
40	行事	高砂(翁)	16.3×8.2	下川原		上底。底面に胡粉を塗布。赤②。
41	行事	高砂(嫗)	14.8×8.8	下川原		上底。底面に胡粉を塗布。赤②。№.40 と対。
42	行事	男雛	14.0×17.4	八橋？		内部にも胡粉を塗布。赤③ 金屏風 35.3×11.0 cm、絵は「娘道成寺」。台座 18.3×11.0×1.9 cm×2 台、杉材。
	行事	女雛	16.3×17.4	八橋？		
43	娘	子守り	13.0×7.2	下川原		底面を塞ぎ、底面にも胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。赤③。
44	娘	手つなぎ	10.8×6.4	下川原		底面を塞ぎ、底面にも胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。赤②。
45	娘	子守り(えんつこ)	10.2×10.0	下川原		底面を塞ぎ、底面にも胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。赤③。
46	童子	馬乗り童子	12.3×10.5	下川原		底面を塞ぎ、底面にも胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。
47	動物	ねこ	10.3×7.6	附馬牛		赤②。
48	その他	朝鮮通信使 (太鼓)	13.4×6.2	下川原		底面を塞ぐ。胡粉塗布用の孔。赤②。
49	その他	朝鮮通信使 (ラッパ)	13.2×5.3	下川原		底面を塞ぐ。胡粉塗布用の孔。赤②。

50	その他	楽団(笛)	13.2×6.1	下川原		底面を塞ぐ。胡粉塗布用の孔。赤②
51	その他	楽団(ラッパ)	13.3×7.2	下川原		底面を塞ぐ。胡粉塗布用の孔。赤②。
52	その他	楽団(大太鼓)	12.6×6.2	下川原		底面を塞ぐ。胡粉塗布用の孔。赤②。

コレクション名　　豊口秀一所蔵

№.	区分	資　料　名	法　　量 (高さ×幅 cm)	製作地	作　者	備　　考
53	信仰	牛乗り天神	14.1×12.4	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。振ると音が鳴る。赤②。
54	信仰	大黒天	9.3×7.7	瀬田石		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。空気孔有り。赤②。
55	信仰	大黒天	16.7×12.3	瀬田石		底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗布した痕跡あり。赤②。
56	信仰	恵比寿	17.5×12.4	瀬田石		底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗布した痕跡あり。赤②。
57	信仰	狛犬	9.7×5.5	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。金泥で奉納の文字。赤②。
58	行事	高砂(翁)	15.7×11.2	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。振ると音が鳴る。赤②。
59	行事	高砂(嫗)	15.6×6.5	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「六」の墨書。赤②。
60	行事	男雛	17.3×18.5	瀬田石		底面に和紙を貼る。残った和紙に胡粉を塗布した痕跡あり。墨書判読できず。頭と胴部は別作り。赤②。
61	行事	女雛	13.7×16.0	瀬田石		底面に和紙を貼る。残った和紙に胡粉を塗布した痕跡あり。墨書判読できず。赤②。
62	行事	巴御前	16.7×12.1	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。小豆が入り、振ると音が鳴る。赤②
63	行事	源義経	13.1×9.9	瀬田石		底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗布した痕跡あり。赤②。
64	行事	源義経	13.1×9.6	花巻		底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗布した痕跡あり。墨書判読できず。赤①。
65	行事	山姥と金時	18.6×14.0	瀬田石		底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗布した痕跡あり。赤②。

66	行事	五人囃子(小鼓)	9.1×10.5	瀬田石		底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗布した痕跡あり。赤②。
67	娘	習い事(琴)	11.3×14.0	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。墨書判読できず。赤②。
68	娘	芸者(太鼓)	11.2×13.3			底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。小豆が入り、振ると音が鳴る。赤②。
69	娘	立ち娘	18.6×9.2	瀬田石		底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗布した痕跡あり。赤②。
70	娘	花魁	14.3×7.0	下川原		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。赤③。
71	娘	手つなぎ	11.4×6.7	下川原		底面を塞ぐ。底面に胡粉の塗布なし。胡粉塗布用の孔。赤②。
72	娘	犬抱き	11.6×14.2	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。振ると音が鳴る。赤②。
73	童子	宝亀ささえ童子	22.8×13.9			底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。文様が丁寧。赤②。
74	童子	えんつこ	7.3×5.6	瀬田石		底面に和紙を貼り、和紙に胡粉を塗布。振ると音が鳴る。赤②。
75	童子	司馬温公の甕割り	14.9×19.4	瀬田石		底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗った痕跡あり。墨書判読できず。赤②。
76	童子	太鼓敲き	11.6×14.2	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。振ると音が鳴る。赤②。
77	童子	馬乗り童子	12.2×10.5	下川原		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。赤②。
78	童子	力士(俵抱き)	10.8×9.6	瀬田石		底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗った痕跡あり。赤②。
79	童子	相撲	10.0×12.1	下川原		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。赤②。
80	童子	虎乗り力士	11.2×9.0	下川原		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。赤②。
81	童子	鯛抱え	19.0×16.9	瀬田石		底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗布した痕跡あり。赤②。
82	動物	犬(鞠押さえ)	12.5×8.4	下川原		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。赤②。
83	動物	ねこ	17.1×12.7			底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗った痕跡あり。赤②。
84	動物	犬(チン)	10.1×10.7	下川原		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。

85	動物	牛	3.9×10.6	瀬田石		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔無し。赤②。
86	動物	うさぎ(袋かつぎ)	11.0×19.6	瀬田石		底面の和紙は剥離。残った和紙に胡粉を塗布した痕跡あり。赤②。
87	その他	芸人(三味線)	12.5×7.3	下川原		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。赤②。
88	その他	芸人(ギター)	14.9×6.0	下川原		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。赤②。
89	その他	朝鮮通信使(ラッパ)	14.0×4.9	下川原		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。
90	その他	芸人(尺八)	15.4×6.7	下川原		底面を塞ぐ。底面に胡粉を塗布。胡粉塗布用の孔。赤②。
91	土笛	唐人(笛吹き)	6.1×3.2			背面に吹き口を持つ。3点とも底面への胡粉の塗布なし。赤②。
92	土笛	子守り	5.7×3.4			
93	土笛	童子	5.7×3.6			

コレクション名　　秋田県立博物館所蔵

No.	区分	資料名	法量(高さ×幅 cm)	製作地	作者	備考
94	信仰	天神	14.5×12.4	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。光沢あり。
95	信仰	山の神(男)	18.5×13.3	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。光沢あり。
96	信仰	山の神(女)	27.3×11.3	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。光沢あり。
97	行事	高砂(翁)	20.0×11.2	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。光沢あり。
98	行事	高砂(嫗)	19.8×10.7	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。ツヤ・光沢なし。
99	童子	鯛車	16.1×20.6	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤②。光沢なし。
100	童子	山姥と金時	19.9×16.8	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。光沢あり。
101	童子	金時	15.6×15.0	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。光沢あり。
102	童子	宝亀ささえ童子	22.4×14.0	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。光沢あり。
103	行事	源義経	16.5×12.2	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。光沢あり。
104	行事	武内宿彌	17.7×11.7	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。光沢あり。
105	行事	神功皇后	18.8×12.4	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。光沢あり。

コレクション名　　小坂町立総合博物館郷土館所蔵

No.	区分	資　料　名	法　　量 (高さ×幅 cm)	製作地	作　者	備　　考
106	行事	三番叟	16.0×16.5	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤② 光沢なし。
107	信仰	牛乗り天神	14.6×14.0	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤② 光沢なし。
108	信仰	山の神(男)	18.3×13.3	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。 光沢あり。
109	信仰	山の神(女)	27.9×11.8	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。 光沢あり。
110	信仰	恵比寿	39.8×24.0	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。裏は黒塗り。 赤③。光沢あり。
111	信仰	恵比寿	39.5×24.0	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤②。 台座と白に光沢あり。
112	信仰	大黒天	38.5×―	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤③。群青・金以外は光沢あり。同型もう一体あり、群青にも光沢あり。
113	童子	鯛車	16.3×20.4	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤②。 光沢なし。
114	童子	宝亀ささえ童子	23.0×13.6	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤②。 光沢なし。
115	娘	子守り	16.2×8.3	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤②。 光沢なし。
116	童子	山姥と金時	19.5×14.5	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤②。 光沢なし。
117	行事	内裏雛(男雛)	20.1×19.6	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。くすみの無い赤を使用(赤③)。光沢あり。
118	行事	内裏雛(女雛)	13.5×21.0	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。くすみの無い赤を使用(赤③)。光沢あり。
119	行事	巴御前	17.3×12.4	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤②。 光沢あり。
120	行事	武内宿彌	18.2×12.2	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤②。 光沢あり。
121	行事	神功皇后	16.3×11.5	小坂町	菊沢陶造	底面にベニヤ板。赤②。 光沢あり。

コレクション名　　井上伸雄所蔵

No.	区分	資　料　名	法　　量 (高さ×幅 cm)	製作地	作　者	備　　考
122	信仰	牛乗り天神	14.1×13.4	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「四五」の墨書。内部に丸めた紙。赤②。
123	信仰	狐犬(キツネ)一対	12.5×7.5	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「一四」の墨書。赤②。

124	行事	獅子舞	13.2×11.5	瀬田石		底面に罫線紙を貼る。墨書判読できず。赤②。
125	行事	獅子舞	10.2×8.6	花巻		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。赤は橙色を呈す。文様は丁寧。赤①。
126	行事	内裏雛(男雛)	20.5×19.5	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「十六」「二」の墨書。「右大臣」の朱書。赤②。
127	行事	内裏雛(女雛)	13.7×22.1	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「十六」の墨書。内部に丸めた紙。「左大臣」の朱書。赤②。
128	行事	五人囃子(笛)	9.2×10.6	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「四〇」の墨書。内部に丸めた紙。赤②。
129	行事	源義経	16.3×11.9	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「六五」の墨書。赤②。
130	行事	平敦盛	13.2×12.0	花巻		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。墨書なし。赤①。
131	行事	平敦盛	10.5×10.5	花巻		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。墨書なし。赤①。
132	娘	扇持ち娘	16.7×14.4	瀬田石		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「八五」の墨書。赤②。
133	娘	太鼓打ち	16.0×9.0	瀬田石		底面の和紙剥離。花のスジまで表現。赤②。
134	童子	おすわり	12.5×8.7	花巻		底面に和紙を貼る。胡粉の塗布なし。墨書判読できず。赤①。
135	信仰	布袋	13.5×16.8			底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「アノヌ」「ヨナ」「★★ミ」の墨書。和紙の裏側にも「五拾・・」の墨書。赤②。
136	その他	騎馬の軍人	13.1×11.1			底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。「九〇」の墨書。日清戦争を題材にしたものか。赤②。
137	信仰	大黒天	12.2×9.5	花巻		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。顔料(蘇芳)の剥がれが目立つ。赤①。
138	信仰	恵比寿	12.8×9.6	花巻		底面に和紙を貼り、胡粉を塗布。顔料(蘇芳)の剥がれが目立つ。振ると音が鳴る。赤①。

1

2

3

4

5

6

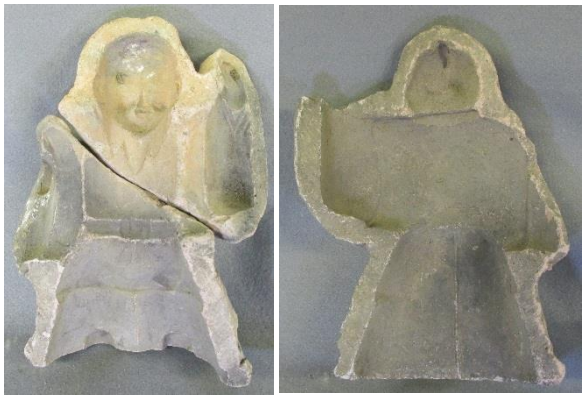
7

8

第 26 図　小坂町立郷土館所蔵の型(1)

9

11


12

10

13

14

第 27 図　小坂町立郷土館所蔵の型(2)

15

16

18

21

17

19

20

22

第 28 図　小坂町立郷土館所蔵の型(3)

23

24

25

26

27

29

28

型の名称・法量は第 5 表に記載

第 29 図　小坂町立郷土館所蔵の型(4)

第５表　小坂町立郷土館所蔵の型の種類と法量

型 No.	型の名称	法　　量 （高さ×底cm）	土人形の番号と法量・縮小率 （数字は第８図～24図の番号に対応する）
1	キツネ（左向き）	11.5×7.2	
2	キツネ（右向き）	11.7×7.0	
3	天神	15.6×9.2	**94**（14.5 cm、92.9%）◇
4	牛乗り天神（1）	14.0×－	－
5	牛乗り天神（2）	15.7×14.0	1　（15.5 cm、98.7%）▲
6	恵比寿	12.5×8.8	－
7	大黒天（1）	19.7×13.8	－
8	大黒天（2）	11.8×8.8	－
9	恵比寿	42.5×25.8	**110**（39.8 cm、93.6%）☆◆ **111**（39.5 cm、92.9%）☆◆
10	大黒天	（39.0）×（25.5）	**112**（38.5 cm、　　）☆◆　　※型破損のため
11	山の神（女）	29.5×11.0	**96**（27.3 cm、92.5%）☆◇ **109**（27.9 cm、95.6%）☆◆
12	高砂（翁）	16.6×8.9	－
13	高砂（嫗）	17.1×6.6	－
14	内裏雛（女雛）	14.0×（22.5）	**118**（13.5 cm、96.3%）☆◆
15	座り娘	10.4×12.5	－
16	芸者　太鼓打ち	11.5×13.5	68（11.2 cm、97.3%）△
17	スゲ笠を持つ娘	16.7×8.2	－
18	子守り	17.0×8.5	**115**（16.2 cm、95.3%）☆◆
19	スモウ	9.5×－	－
20	俵持ち童子	9.5×6.2	－
21	宝亀ささえ童子	24.8×12.2	73（22.8 cm、91.9%）△　　**102**（22.4 cm、90.3%）☆◇ **114**（23.0 cm 92.7、%）☆◆
22	馬乗り童子	14.3×11.6	**18**（13.3 cm、93.0%）▲　　46（12.3 cm、86.0%）○ 77（12.2 cm、85.3%）△
23	義経？	16.5×10.3	－
24	神功皇后	18.1×10.8	－
25	武内宿彌	19.6×－	**104**（17.7 cm、90.3%）☆◇　**120**（18.2 cm、92.8%）☆◆
26	源義経	18.1×12.9	**103**（16.5 cm、91.2%）☆◇
27	にわとり	17.1×－	－
28	ねこ	18.5×12.5	83（17.1 cm、92.4%）△
29	仏像（立像）	20.5×7.5	－

注　☆：菊沢陶造の名のある土人形（秋田県立博物館で記入したものか）

注　◇：秋田県立博物館所蔵　◆：小坂町立郷土館所蔵　△：個人所蔵　▲：鹿角市教育委員会所蔵

　　○：大湯小学校所蔵

注　（）内の数値について

　　・法量は土人形の高さの測定値

　　・％は縮小率（計算式　　縮小率＝土人形の高さ÷型の内寸）

注　**黒太字**：小坂町立郷土館所蔵の型から起したもの

　　青文字：小坂町立郷土館所蔵の型から起した可能性が高いもの

　　赤文字：小坂町立郷土館所蔵の型から起した可能性が低いもの

第６表　　全国の土人形一覧

	県　　名	土人形の名称と所在地
北海道 ・ 東北地方	北海道	
	青森県	**青森手捻り土人形（青森市）**、**下川原土人形（弘前市）**
	岩手県	**花巻人形（花巻市）**、附馬牛人形（遠野市）、気仙高田土人形（陸前高田市）
	宮城県	**堤人形（仙台市）**、気仙沼土人形（気仙沼市）
	福島県	根子町土人形（福島市）、**中湯川人形（会津若松市）**
	秋田県	**八橋土人形（秋田市）、中山土人形（横手市）、** 瀬田石土人形（鹿角市）、小坂土人形（小坂町）、 *白岩土人形（仙北市）、浦田土人形（北秋田市）*
	山形県	**酒田土人形　（酒田市）、相良人形（米沢市）**、鵜渡川原人形（酒田市）、 鶴岡瓦人形・大宝寺土人形（鶴岡市）、渋江土人形（山形市）、 猪之沢土人形・花山土人形・狐石土人形（東根市）、与六土人形・平清水土人形（山形市）、下小菅土人形・成島土人形・寺沢土人形（米沢市）、 横前瓦人形（新庄市）
関東地方	茨城県	
	栃木県	
	群馬県	
	埼玉県	**鴻巣土人形（鴻巣市）**
	千葉県	**芝原土人形（長南町）**
	東京都	**今戸土人形（台東区）**
	神奈川県	
北陸地方	新潟県	**山口人形（阿賀野市）**、**村上土人形・大浜土人形（岩船郡周辺）**、**今町土人形（見附市）、**栃尾土人形（長岡市）、三条土人形（三条市）、八幡土人形（佐渡市）、*柏崎土人形（柏崎市）*
	富山県	富山土人形（富山市）
	石川県	金沢土人形（金沢市）
	福井県	武生土人形（福井市）
中部地方	岐阜県	**高山土人形（高山市）**、姫土人形・広見土人形（可児市）、 市原土人形（瑞浪市）
	長野県	中野土人形（中野市）
	山梨県	
	静岡県	
	愛知県	名古屋土人形（名古屋市）、犬山・三河旭土人形（三河地方）、尾北土人形（尾北地方）、久保一色土人形（小牧市）、豊橋土人形・乙川土人形（豊橋市）、棚尾土人形・大浜土人形（碧南市）、大口土人形・扶桑土人形（丹羽郡地方）
近畿地方	大阪府	境土人形（堺市）、住吉土人形（大阪市）
	京都府	**伏見人形（京都市）**
	兵庫県	**稲畑土人形（丹波市）**、葛畑土人形（養父市）、村岡土人形（香美町）
	奈良県	
	三重県	
	滋賀県	**小幡土人形（東近江市）**
	和歌山県	

中国地方	鳥取県	**倉吉泥人形（倉吉市）**、米子土人形（米子市）、北条土人形（北栄町）、堀越土人形（八頭町）、*御来屋土人形（大山町）*
	島根県	**松江土人形（松江市）**、長浜土人形（浜田市） 出雲土人形・出雲今市土人形（出雲市）
	山口県	
	広島県	**三次土人形**・宮の峡土人形（三次市）、上下土人形（府中市）、庄原土人形（庄原市）、常石土人形（福山市）
	岡山県	久米土人形（津山市）、百々土人形（美咲町）
四国地方	徳島県	
	高知県	十市土人形（南国市）
	愛媛県	松山土天神（松山市）
	香川県	
九州地方	福岡県	**古博多人形・今宿土人形（福岡市）**、**津屋崎土人形（福津市）** 赤坂土人形（筑後市）
	長崎県	古賀土人形・長崎土人形（長崎市）
	大分県	四日市土人形（宇佐市）、小畑土人形（日田市）、一文土人形（大分市）
	佐賀県	**尾崎土人形（神埼市）**、**弓野土人形（武雄市）**、白石土人形（みやき町）、のごみ土人形（鹿島市）、杵島山土人形（杵島郡）
	宮崎県	**佐土原土人形（宮崎市）**
	熊本県	**木葉土人形（玉東町）**、熊本土人形（熊本市）、天草土人形（天草市）
	鹿児島県	**帖佐土人形**　・日向山土人形（姶良市）、宮之城土人形（さつま町）、東郷土人形（薩摩川内市）、苗代川土人形（日置市）、向花土人形（霧島市）、垂水土人形（垂水市）
	沖縄県	

※**太字**：継続・製作中　　細字：廃絶　　*斜字*：不明・詳細不明

※土人形の名称・製作地は参考文献、各ホームページを参照に作成した。

※参考文献によっては「〇〇人形」や「〇〇土人形」と標記しているものがあるが、統一せずに一般的に使用されている名称を使用した。

※空欄は土人形が作られていない都道府県である。

※全国で製作された土人形をすべて拾い上げていない可能性がある。

《注　　釈》

注１　【伊藤良三】　明治 15(1882)年生、昭和 39(1964)年没。教育者・政治家。教員退職後、毛馬内町長に推挙される。昭和 30(1955)年に初代十和田町長となる。『毛馬内郷土史資料(上・中・下)』、『毛馬内郷土史稿』等を執筆。これらの図書には当時の毛馬内町の様子が詳細に記録されている。

注２　【くゝり人形】　一般的には押絵人形を言う。押し絵と同じ技法で作られた人形で、人の形に切り抜いた厚紙にきれいな布を重ね貼りして、その中に綿を詰めて立体感を出している。安定性に欠けるため後ろに竹串を通して、木の台座に刺して飾る。雛人形や武者、歌舞伎役者等があり、全国各地で作られている。

注３　【かべ人形】家屋の土壁に使われる土を「壁土」と呼んだことから、鹿角地方では土人形を「かべ人形」と呼んだ。弘前では土人形を作るところも販売する店も「泥面子屋」とか「壁人形屋」と呼んでいた。

注４　【顔料】　土人形には彩色のため蘇芳や群青等が使用されている。原材料の違いから「顔料」と「染料」の二種類に分けられる。「顔料」は「溶液や水に溶けない物質を含むもの」で鉱物を原料とする鉛丹や群青がある。「染料」は「溶剤や水に溶け込む物質が含まれるもの」で植物を原料とする蘇芳・紫・茜等がある。土人形にはこの二種類の彩色材が使われているが、本書ではこれらをまとめて「顔料」と表記した。

注５　【天神人形】　菅原道真を祀った天神信仰から生れたもので、その姿をかたどった人形。天神は学問・書道の神として親しまれたほか、農耕神としても広く信仰を集めたことから、各地で作られている。

注６　【福田利英】　教職退職後、小坂町立総合博物館郷土館の研究員となる。小坂町の土を使った焼き物(小坂焼)づくりを目指し、陶芸愛好者たちと陶芸教室を開設して、その体表を務めた。

注７　【瀬田石土人形】　鹿角地区では土人形を「じんじょ人形」と呼んでいた。「じんじょ」とは「しん(神)ぞ」の訛音。「-------棚の上にある」。出典は大里武八郎著『鹿角方言考』。一般的には「神棚に上げる」の意。

注８【ツヤと光沢】　文章中にツヤと光沢の表現を用いている。光沢は無色透明な溶剤を塗り、ガラス質的な光り(反射)を示す状況を指す。

注９　【十和田銀山】　所在地は十和田湖の西岸である鹿角郡小坂町銀山。寛文 5(1665) に鉛鉱山として開坑された。明治 4(1871)年に官営化されたが、翌年に休山。同 14(1881) 年に銀山として再開発されるが同 30(1897)に資源枯渇のため閉山となる。菊沢三蔵が瀬田石に転居した時期は明治 5 年以前と考えられる。

注 10　【小真木鉱山】　所在地は鹿角市十和田字瀬田石。瀬田石集落から西へ約 800m の地点。慶長 3(1598)年に金山として開発、寛文 4(1664)年に銅山として創業した。創業当時は白根金山と呼んだ。

注 11　【鹿角鎌】　文政 4(1821)年の『御領分産物書上帳』に「花輪通　一、鎌、花輪町」と記載されている。明治 20 年代に盛んに作られ、三戸・八戸、盛岡、津軽等に運ばれ、販売された。刃が一直線だったため「一文字鎌」とも呼ばれた。

注 12　【毛馬内焼】　『鹿角市史　第三巻下』では大正 11 年、毛馬内上町の高橋七郎兵衛が屋敷内に窯を作り、名古屋から陶工を招き始めたとある。文献 46 の『鹿角のあゆみ』には江戸時代「毛馬内焼」があったと記載されている。同一のものではないと考えられる。

《引用文献》

引用 1　山東京伝　『日本随筆大成第一期第 15 巻』「骨董集」480 ページ　「享保の比の土雛図」
引用 2　伊藤良三　『毛馬内郷土史資料（一）』 53 ページ
引用 3　鹿角市　『鹿角市史民俗調査報告書第四集－十和田の民俗(下)』 12 ページ下段
引用 4　大蔵永常　『広益国産考』　土屋喬雄校訂　岩波文庫　233 ページ～245 ページ
引用 5　菊地和博　『山形県立博物館研究報告　第 10 号』91 ページ　「梅津コレクションに見る相良人形の形態的分析」の「図 3 土人形系統図 」
引用 6　福田利英　『小坂町立総合博物館郷土館研究報告　郷土研究　第 2 号』「誇り高い郷土小坂の民芸品・小坂土人形」 27 ページ～31 ページ
引用 7　俵有作　『日本の土人形』　180 ページ下段
引用 8　高橋正　『秋田県立博物館研究報告　第 24 号』「八橋人形の歴史と信仰」59 ページ
引用 9　「鹿角のあゆみ」刊行会　『鹿角のあゆみ』26 ページ
引用 10　宮城一杉　『花輪町史』　63 ページ

《参考文献》

文献 1　山東京伝　『日本随筆大成第一期第 15 巻』「骨董集」　吉川弘文館　平成 6 年
文献 2　高橋 学ほか　『石川県埋蔵文化財情報第 33 号』「近世墓にみる階層性」　公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　2015 年 3 月
文献 3　伊藤良三　『毛馬内郷土史資料（一）』　1964 年 3 月
文献 4　鹿角市　『鹿角市史民俗調査報告書第四集－十和田の民俗(下)』　1992 年 1 月
文献 5　大蔵永常　『広益国産考』　土屋喬雄校訂　岩波文庫　岩波書店　1977 年
文献 6　菊地和博　『山形県立博物館研究報告　第 10 号』　「梅津コレクションに見る相良人形の形態的分析」1989 年
文献 7　高橋信雄　『祈りと遊び　花巻人形の世界』　盛岡出版コミュニティー　2017 年
文献 8　花巻市博物館　第 5 回企画展『花巻人形と東北の土人形』　2006 年
文献 9　小坂町　『小坂町史』　1975 年
文献 10　鹿角市文化財保護協会　『上津野　№42(表紙写真説明)』 平成 29 年
文献 11　福田利英　『小坂町立総合博物館郷土館研究報告　郷土研究　第 2 号』　「誇り高い郷土小坂の民芸品・小坂土人形」　1988 年
文献 12　足立孔　『全国郷土人形図鑑』　光芸出版　1982 年 12 月
文献 13　鹿角市　『鹿角市史第三巻(上)』　平成 5 年 11 月
文献 14　鹿角市　『鹿角市史第四巻』　平成 8 年 3 月
文献 15　高橋正　『秋田県立博物館研究報告　第 24 号』「八橋人形の歴史と信仰」1999 年 3 月
文献 16　豊口秀一　土人形収納箱に添付された説明書
文献 17　十和田市民センター　展示説明資料
文献 18　坂本一也・薗部澄　『日本の郷土玩具(東日本編)』 毎日新聞社　昭和 47 年 12 月
文献 19　八戸市博物館　『特別展図録　東北の土人形』　昭和 61 年
文献 20　板垣英夫　『山形県立博物館研究報告　第 3 号』「山形県の土人形」1975 年
文献 21　秋田魁新報社　『秋田さきがけ』　「ほっこり、素朴に優しく　亥年×八橋人形」　2019 年 1 月 1 日
文献 22　三浦正宏　『お宝ハンドブック』「秋田の宝　おらほの宝　6　秋田の郷土玩具」　秋田県教育委員会　平成 19 年
文献 23　牧野玩太郎・稲田年行　『日本郷土玩具集成　第 3 巻　土』　日本図書センター　昭和 44 年 7 月
文献 24　山形県立博物館　『特別展　やまがたの玩具展(展示パンフレット)』　昭和 58 年

文献 25　秋田県立博物館　『秋田県立博物館研究報告　№3』
「展示報告　鹿角展　伝説のさと鹿角」　1978 年
文献 26　熊谷章一・吉田義昭　『図録/岩手の民俗・民芸双書②』「花巻人形」
郷土文化研究会　　昭和 50 年 8 月
文献 27　小井川百合子　『仙台市博物館調査研究報告　第 4 号』
「堤人形と信仰　照徳寺内地蔵堂の例」　昭和 58 年度
文献 28　酒井宗孝・中島明子　『花巻市博物館研究紀要第 4 号』
「花巻人形調査報告－人形の洗浄作業に伴う成果報告－」
花巻市博物館　　平成 20 年 3 月
文献 29　小原伸博　『花巻市博物館研究紀要第 10 号』
「花巻人形の種類－形状の違う人形の分類について－」
花巻市博物館　　平成 27 年 3 月
文献 30　高橋信雄　　『花巻市博物館研究紀要第 10 号』「花巻人形の制作者」
花巻市博物館　　平成 27 年 3 月
文献 31　菊地正樹　　『花巻人形の愉しみ　江戸時代から次世代へ』　2019 年 2 月刊
文献 32　かづの新聞　「父瀬田石壁じんじょ　小坂土人形」　昭和 63 年 4 月 28 日(木曜日)
文献 33　畑野栄三　　『全国郷土玩具ｶﾞｲﾄﾞ 1』「北海道・東北・信越・北陸」
婦女界出版社　　平成 4 年 1 月刊
文献 34　新井智一　　『分類別に見た郷土人形』 東京図書出版会　2002 年 3 月刊
文献 35　北村哲郎編　　『日本の美術　№11』「人形」　至文堂　昭和 42 年 3 月
文献 36　弘前市立博物館　　『下川原土人形』　昭和 60 年 3 月
文献 37　現代用語の基礎知識編集部　『縁起物』　自由国民社　2016 年 3 月
文献 38　甲斐みのり　『はじめましての郷土玩具』　グラフィック社　2015 年 3 月
文献 39　佐々木一澄　『てのひらのえんぎもの』　二見書房　2018 年 2 月
文献 40　岩上力　『縁起物』　　光村推古書院　　2003 年 1 月
文献 41　不破哲三　『郷土人形　西・東』　里文出版　2013 年 12 月
文献 42　藤森武　『人形　日本と世界の人形のすべて　第３巻』「郷土人形と玩具」
京都書院　1986 年
文献 43　京都府立総合資料館　『ふるさとの土人形』　京都府立総合資料館友の会　昭和 45 年
文献 44　俵有作　『日本の土人形』　文化出版局　1978 年 9 月
文献 45　足立孔ほか　『大塚製薬報№439～443（別冊)』「東北の土人形　①～⑤」
大塚製薬工場　　1990 年
文献 46　「鹿角のあゆみ」刊行会　『鹿角のあゆみ』　　昭和 44 年 7 月 25 日
文献 47　斎藤良輔編　『郷土玩具辞典』　東京堂出版　昭和 46 年 8 月
文献 48　宮城一杉　『花輪町史』　花輪町史刊行会　昭和 32 年
文献 49　秋田魁新報社『秋田魁新報』「秋田の人形　小坂の泥人形」　昭和 35 年 2 月 20 日夕刊
文献 50　秋田魁新報社『秋田さきがけ』「美の散歩　土人形(小坂町)」昭和 42 年 1 月 18 日夕刊
文献 51　秋田魁新報社『秋田さきがけ』「小坂土人形　43 年間、ひと筋に」
昭和 47 年 7 月 18 日夕刊
文献 52　秋田魁新報社『秋田さきがけ』「郷土名物　また消えそう」　昭和 48 年 2 月 20 日夕刊
※この記事に陶蔵が交通事故に遭い、製作活動を断念したことが記載されている。
文献 53　秋田魁新報社『秋田さきがけ』「地域リポート　地元の土を使い小坂焼」
昭和 63 年 2 月 2 日夕刊

付録１　ぬり絵

第９図２　　大黒天

写真を参考に色を塗り、楽しんでください。

付録２　ぬり絵

第 10 図 12　扇持ち貴婦人

写真を参考に色を塗り、楽しんでください。

書籍名　『鹿角市歴史民俗資料館調査資料 2　鹿角の土人形』
発行者　鹿角市歴史民俗資料館
（指定管理者　太平ビルサービス株式会社　秋田支店）
発行日　令和 2 年 3 月 31 日
住　所　〒018-5201　秋田県鹿角市花輪字中花輪 113 番地
電話・FAX　0186-22-7288

※　参考文献などに本書を使用した時は、出典を明記してください。
※　本書で引用した文章をそのまま孫引きせず、必ず原本に当たってください。
※　本書に掲載した図や写真は、発行者や所蔵者から許可を得て掲載しております。
本書からの転載・引用はしないでください。